

会報

No. 78

平成21(2009)年3月15日

京都府図書館等連絡協議会

事務局

京都市左京区岡崎成勝寺町9
京都府立図書館内
TEL (075) 762-4655



本というメディアの持つ強さ 可能性について考える

ジュンク堂書店大阪本店 店長 福嶋 聡

ここ数年間で、いくつもの出版社が倒産しました。その中には、老舗、あるいは中堅と呼ばれ、多くの売れる本を市場に送り出してくれていた出版社も含まれます。講談社の『現代』をはじめ、雑誌の休刊も相次いでいます。年間千軒といわれる書店の転廃業のペースも落ちていません。書籍・雑誌というメディアは、凋落一途とも言われています。昨秋から吹き荒れる世界的な経済減速の風が、今年はますますこの傾向に拍車を掛けるかもしれません。その風は、市場だけではなく国家・自治体にも及びますから、市場にある私たち書店業界同様、公的な予算によって営まれていた図書館業界にも逆風となるでしょう。

大、そうした状況もまた、本を扱う私たちにとって逆風となっていることは否めません。しかし、否だからこそ、私たちは今改めて本というメディアの持つ強さ可能性について、考え抜くべきなのではないでしょうか。昨年、私が最も勇気づけられたのは、『広辞苑第六版』が、予想以上に売れたということです。インターネットやフリーペーパーなどで、多くの情報が無料で入手できる状況にあつて、私たちが「商材」として扱う書籍という「物体」に、「Canon」(典拠・規範)が求められているのではないか、情報が溢れば溢れるほど、人々は信頼できる「Canon」(典拠・規範)を求めるとは思えないか。出版社の、そして書店や図書館のレゾン・デートルはそこに見出せるのではないか。

世界的な経済減速の風が吹き荒れる中、例えば『週刊東洋経済』や『週刊ダイヤモンド』の売れ行きは伸びているとも聞きます。世が厳しくなればなるほど、人々は信頼できる情報源を求めるのです。

昨年五月に発売の『週刊金曜日』

で『だれが本を殺すのか』を書いたノンフィクション作家の佐野眞一さんと対談しました。その時に佐野さんは、「二〇〇一年に『だれが本を殺すのか』で書いた予言は、その後出版・書店業界の展開でほとんど当たったが、唯一当たっていないのは、コンテンツがもつと電子化するということだった。」とおっしゃいました。「紙の本」は、意外としぶとい。「改めて考えてみると「本」というのは、コンテンツにとつてとてもいい Vehicle (乗り物) なのだ」と。

「山奥の村、なかなか外の世界とは触れ合えない村の子どもたちに対してこそ、本を通じて、世界はこんなにも広い、こんなにも多様だ、ということを伝えたいのです。」と、目をキラキラさせて語った、和歌山の山村で書店を営むイハラ・ハートショップ店長井原万見子さんという素敵な方とも巡りあえました。

本というとても魅力的なメディア、その普及のために働くということとは、とてもすばらしいことだと思います。それを、私たち書店人は、図書館人と共有している、と。

出版不況が叫ばれる中、ジュンク堂は、昨年十二月には藤沢店、札幌店と新規出店し、今年四月には台湾に天母店、沖縄に那覇店を出店予定です。本という「Vehicle」を信ずるからこそこのことと、ご理解いただければ幸いです。

平成二十年度

京図連協実務研修会

北部地区実務研修会に

参加して

舞鶴市立東図書館 西躰 朋子

平成二十年十月十七日（金）、みやび歴史の館において、北部地区実務研修会が、ジュンク堂書店の福岡聡氏を講師に迎えて開催されました。

中でも印象に残ったことがふたつあります。ひとつは、（本は結果ではない。それをきっかけにいろんな人との出会いがあり、意見が言いあえる事が大事だ）ということです。『自死という生き方』という本を遺して自死された哲学者をとりあげて、せっかくの出会いを否定してしまふ行為ではないかとおっしゃいました。もうひとつは、神戸サンパル店で、阪神淡路大震災被災後わずか二週間で営業を再開なさった時、たくさんの方が本を求めて来店し、その人たちから「ありがとう」と声を

中部地区実務研修会に

参加して

亀岡市立図書館 岸田 敦子

平成二十年十一月十三日（木）、

京都市右京中央図書館において開催されました「利用者とのより良い関係をめざして相手の真意を汲み取る、聞き上手になる」に、現場にたち利用者との対応で日々直面する様々な事例について、他館ではどのように対応されているのか、どのような事に困っておられるのか、お話を聞かせていただければと思います。

講師の田村先生とのディスカッションにより、「要望にたいしての代替手段を考える必要」「法的レベルのものについては断る」という、できる事できない事の区別をする必要性は確かにあると思いました。利用者の意に添わない代替案の提示の方法等、まだまだ各現場にいろいろな皆さんの事例をお聞きしたいと思う間に時間が過ぎてしまいました。田村先生の「利用者問題は職員問題でもある」の言葉どおり普段から職員同士のコミュニケーション・共通理解をはかり、利用者の要望・苦情に臨機応変に対応しなければなら

りません。相手の話を聞くということ、何を求めているのか、真意はどこなのか、それを踏まえじっくり話をひきだすことが自身の大きな課題となりました。

最後に、右京中央図書館の、配架・配置・システム等興味津々で見学させていただきました。ありがとうございました。

南部地区実務研修会に

参加して

京都府立図書館 是住久美子

平成二十年十二月七日（日）長岡

京市立図書館において、科学とあそびの会より、小野操子先生と小竹愛子先生をお招きして「科学あそびは、こんなにおもしろい！」が開催されました。今回の研修会は京都府教育委員会ボランティア育成事業対象講座として募集し、五十六名が参加しました。

講義の前半は小野操子先生から、ストローを使った音の出るふうせんなどの作り方を教わり、参加者も一緒に作成しました。子どもたちが完成させることができるための事前準備のしかたなどの紹介もあり、科学

とあそびの会での活動を通じた様々なお話を聞くことができました。

後半は小竹愛子先生が、磁石を使った実験などを披露されました。クイズ形式で実験の結果を予想させてから実験を通して答えを導き出すなど、子どもたちの興味を上手くかきたて「どうして？」と思わせる工夫がいたるところにありました。今回の研修会では、子ども達があそびの体験を通じて、科学への第一歩をふみだすことのできる科学あそびの手法をたくさん学ぶことができました。



平成二十年度

全国図書館大会

全国図書館大会に参加して

京都市立図書館 小松 由佳

本年度大会は平成二十年九月十八日（木）、十九日（金）、神戸市で開催されました。

初日の基調報告では、日本図書館協会理事長の塩見昇氏が図書館の現状と改正図書館法及び今後の課題について話されました。図書館法改正は教育改革の一環であり、それに伴い国会審議で図書館に関する活発な議論が行われたこと、これを活かすためには教育全体の中での図書館の位置づけを意識し、その意義を教育振興計画に積極的に盛り込んでいくべきことなど、領きつつ考えさせられる内容でした。

続いて、ドイツ文学者の池内紀氏より「図書館の小宇宙」と題する記念講演がありました。少年時代から現在まで、自身の経験に基づく本や図書館の価値について話され、現代社会の問題点にも触れながら、今後の図書館に一層期待すると結ばれました。

二日目の分科会は、「第一分科会・公共図書館」及び「第一分散会・図書館サービス」に参加しました。午前に講演が三つ、午後に事例発表が三つと盛り沢山でしたが、いずれも図書館を様々な視点から捉えなおす良い機会となりました。特に印象に残ったのは筑波大学大学院講師・濱田幸夫氏の講演と豊岡市立図書館の事例発表で、前者は「行政」の視点から図書館経営を、後者は「利用者」生活者「地域活性化」の視点から図書館の在り方を考えるものでした。サービス拡充と質の維持、経営コストの兼ね合い等は難しいものですが、視点の転換により人を納得させる図書館運営のヒントが得られると実感しました。

初めての大会参加でしたが、内容が濃く充実した二日間で大変勉強になりました。

平成二十年度

全国公共図書館

児童・青少年部門研究集会

全国公共図書館児童・青少年部門

研究集会に参加して

京都市中央図書館 森川 智子

平成二十年十一月六日（木）・七日（金）、栃木県総合文化センターにて開催されました。

「子どもたちに生きる力と喜びを」と読書で拓く未来」を研究主題に、評論家・柳田邦男氏の基調講演「人生の脚本は子ども時代に書かれる」本の力、絵本の力、事例発表・荒川区立日暮里図書館のヤングアダルトサービス、浦安市立中央図書館の乳幼児サービス、宇都宮市立図書館の学校図書館支援事業、及び基調報告「児童サービスの現状と課題」と、内容の濃い二日間でした。

どのテーマも興味深いものでしたが、京都市では今年度から学校団体貸出が始まりましたので、パック（テーマ別に予めセットにした図書）での貸出など、学校図書館へのサービスは大変参考になりました。

また、できるだけ多くの図書に目を通した上でのヤングアダルトの選定の際の苦労話など、どの図書館でも日常業務に忙殺されながらも、新しい取組にチャレンジされている様子にとっても感銘を受けました。（この研究会の休憩中でさえも、「ノルマですから！」とYAを読んでらしたそうなんです！）

子どもの読書離れが進んでいると

云われる中、図書館の果たすべき役割は大変重要なものだと思感するとともに、司書のマンパワーの素晴らしさもまた知ることができました。



南丹市では平成二十年度文部科学省委託事業「子どもの読書応援プロジェクト」により、オーサー・ビジット事業を行いました。

オーサー・ビジット (Author Visit) とは、文字通り著名な作家を招聘し子ども達に直接語りかけてもらうことを通して、子どもの読書推進を図ることをその目的としています。

文科省より先に、平成十五年より朝日新聞社が始めた事業で、毎年多くの応募が殺到する人気事業です。幸運なことに本年度、図書館からの働きかけにより朝日新聞社の事業に

おいても南丹市の小学校に、絵本作家の荒井良二氏を招聘することができました。

文科省委託事業では、招致したい作家を自由に選択し、直接交渉して事業を行うものであったため、絵本作家である長谷川義史氏を小学校低学年に、同じく川端誠氏を小学校高学年向けに、そして、今回の一番の狙いである中学生には、直木賞作家の重松清氏を招聘することで取組みました。

長谷川義史氏は八木小学校の主に低学年を対象に絵本の読み語り、絵を描きながらの「おはなし」や「しりとり」などをしていただきました。長谷川さんのおはなしに、私も身もお腹が痛くなるくらい笑いました。あんまり私がよく笑うので、子ども達も少々驚いた様子でした。子ども達も長谷川ワールドに引き込まれ、絵本をより身近に、そして楽しさを再認識してくれたことと確信しています。

川端誠氏には主に胡麻郷小学校の高学年を対象に、絵本の「ひらきよみ」(川端氏の表現)と、絵本作品の過程をスライドを使って説明していただきました。

私が川端さんから学んだことは、

絵本の読み語りをする時、文字ばかりに気が行き、いかに「絵を読むこと」ができていないかを反省させてもらいました。

そして、作品の生みの親である作家さんの絵本の読み方を通して、息や間のとり方など多くのことを学ぶことができました。

重松清さんには、全校生徒百二十七名の美山中学校において、講演・意見交流の場を持つていただきました。重松作品の特徴の一つは、主人公が子どもの作品が多く、「いじめ」「自殺」「親子関係」などを題材に、子どもの目線と大人の目線を上手く交えて描かれている点にあると考えています。

公共図書館として、特に中学生向けのアプローチの方策に頭を悩ましていた私にとっても、この機会を十二分に活かせるよう中学校と入念に連携を取りました。

中学校も事前学習を全校体制で取り組んでいた、また、私が昨年のブックトークで「卒業ホームラン」を紹介した下地もあって、子ども達も事前学習に積極的に取り組んでくれました。

講演後、担当の先生から次のようなお言葉をいただきました。

「私も、日ごろから気になっている生徒が何人かいて、講演中その子たちの様子をずっと見ていました。どこの子もしつかりと重松さんの顔を見ながら、話を聞いていたので少し安心しました。でも、それ以上に良かった点は、生徒全員の感想文を読んでみて、私たち教師がノーマークだった他の多くの生徒の中にも、さまざまな悩みを持っている子がいること、そして、重松さんの話を聞いて勇気ももらえたことが、大きな収穫となりました。」とのこと。

私も、生徒たちの感想文を読みましたが、そのことで私自身もまた元



気をもたらうことができました。様々な分野の第一線で活躍されている人たちと直接交流することは、子どもだけでなく、大人にとっても大きな財産となりました。

地域の小学校へ

出張して

本を貸し出す

「出前貸出」の実施



京都市醍醐中央図書館

子どもの来館を待つのではなく、図書館が足を運ぼう——最近、図書館の本を多数借りる子どもが増える一方で、全く借れない子どもも増えています。そこで、より多くの子どもにも本と出会う機会をつくり読書の楽しさを味わってほしいと願い、所蔵する児童図書の中から「子どもたちに読んでほしい本」を選び（図書館で子どもに人気のある本はあえて外しました）、地域の小学校に出張して貸し出す「出前貸出」を、昨年十二月、地域にある醍醐小学校の一、二年生を対象に行いました。担当職員はまず、地域の小学校の

子どもたちに図書館や図書館の本の魅力を直接伝えることができる貴重な機会であることを最も大切に考えて本を選び、子どもたちと接することとしました。当日、子どもたちが生き生きとした笑顔で本選びを楽しみ、素直に喜んでくれていた様子が非常に印象的でした。

この取組のもう一つのねらいは、保護者にも子どもと一緒に図書館との関わりを深めていただく機会にしてほしいということです。そこで、本の返却を、学校ではなく、できるだけ子どもと一緒に図書館まで来館して行っていたり、保護者の御協力をお願いしました。



出前貸出を通じて、子どもたちは、クラスの友達と一緒に多くの新鮮な本を直接手に取り選べる楽しい時間をプレゼントするとともに、保護者には、是非とも親子での図書館利用の機会をつくり、増やしていただけることを期待しており、今後も地域の中で実施校を拡げて継続していきたいと考えています。

小さな町の小さな図書館

笠置町立中央公民館図書室

館長 岩井 重彦

笠置町は、京都府の南端に位置し、奈良県にも接している府内で最も小さい町です。元弘の頃、後醍醐天皇が時の鎌倉幕府に立ち向かった「笠置合戦」で有名な笠置山は、紅葉の名所としても知られています。昭和四十八年、笠置町中央公民館内の一室に設置された図書室は、小さな町の小さな図書室として今日まで住民の皆さんに親しまれています。蔵書数は約一万冊、現地での閲覧や貸し出しだけでなく、管内学校や学童保育への団体貸し出しも行っていきます。

そうした活動と学校教育の連携に

より、特に小学校での読書活動が発で、読書数が多く、感想文・葉（しおり）コンクールなどでも優秀な成績をあげています。

一方では、小さな施設で担当者の配置もままならず、図書室としては、これといった事業ができていません。今後は、住民のニーズに応える「小さな町・小さな図書室」ならではの事業の実施が課題と考えています。

府内各図書館や読書施設関係の方々には、相互貸借等で（と言っても、ほとんど借りてばかりですが）大変お世話になっていきます。この場をお借りしてお礼申し上げます。

四月から、相楽東部三町村（笠置町、和束町及び南山城村）の教育委員会が「相楽東部広域連合教育委員会」としてスタートします。これに伴い、各図書室も「広域連合」へ移管されます。しかし、町民に親しまれている「小さな図書室」の良さは、これからも残していきたいと考えています。



平成二十年度 第三回理事会報告

平成二十年度第三回理事会が二月十二日（木）みやづ歴史の館において開催されました。

仁科会長挨拶の後、今年度事業実施について〇読書ボランティア養成支援事業〇第八回「子ども読書絵てがみコンテスト」〇各専門委員会活動状況等についてそれぞれ報告されました。

続いて、〇今年度総括〇次年度事業計画及び予算〇表彰規程について協議されました。

表彰規程は、表彰の対象を時代の変化などに対応したものとすべく、規程の一部改正や施行内規の整備をする方向で進めることとなりました。

また、定期総会は四月下旬頃に開催する方向で進めることとなりました。

その他、〇京都府図書館総合目録ネットワークの現況〇京都府立図書館に関連する市町村連携・支援事業（図書館・読書施設等職員研修、連絡協力車巡回コース、学校支援セット貸出等）〇三重県図書館協会の取組事例等について報告、情報交換がされました。



◇ 研修研究委員会 ◇

★ 中部地区 実務研修会の報告

「利用者とのより良い関係を目指して、相手の真意を汲み取る、聞き上手になる」と題し、十一月十三日（木）三十一名の参加を得て、京都市右京中央図書館にて開催いたしました。講演では、慶応義塾大学文学部教授の田村俊作氏から、パートナーとしての利用者との関係や職員同士のつながりの重要性などを経験談を交えてお話いただきました。また、グループ討議も行われ、参加者からは「もっと話しあいの時間がほしい。」などの感想が寄せられました。

★ 読書ボランティア 養成支援事業対象講座

「科学あそびは、こんなに おもしろい！」（兼・南部地区実務研修会）の報告

十二月七日（日）に五十六名の参加を得て、長岡京市立図書館において開催しました。科学あそびの会より、小野操子氏と小竹愛子氏を講師に迎えて、実技も交えた講演をしていただきました。ストローなどを使った音の出るふうせん作りなどの実技や、磁石を使った実験などもあり、参加者からは、「大変おもしろかった。今回教えてもらったことを子ども達に伝えたい」などの声が聞かれました。

◇ 相互協力委員会 ◇

平成二十年度相互協力実務担当者会議が平成二十一年三月五日（木）府立図書館において開催され、相互協力委員会事業や京都府図書館総合目録関連について説明、報告がされました。

◇ 広報委員会 ◇

平成二十年度の第三回広報委員会を一月八日（木）に京都府立図書館で開催し、今年度の最後となる会報七十八号の編集等について協議を行いました。

会報の紙面構成や巻頭言等の記事内容について協議を行ない、来年度の編集内容についても様々な意見が出され充実した委員会になりました。

編集子

今年度、新メンバーでスタートした広報委員会ですが、アメリカ発の金融危機で百年に一度といわれる世界不況の年になりました。そういった中、府及び各市町村は大変厳しい財政状況であり、来年度の各図書館の予算はより一層厳しいことが予想されます。

しかし、このような時こそ職員一人一人が危機意識をもって様々なアイデアを出すことによって、生涯学習における図書館の存在を高めることが出来るのではないのでしょうか。

最後になりましたが、執筆や紙面づくりにご理解とご協力をいただきました皆様から厚くお礼を申し上げます。来年度も引き続きご支援いただきますようお願い申し上げます。